

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 黒井弘騎

挿絵 大田優一

第一章	癒やしの微笑み	006
第二章	天使の素顔	016
第三章	悪意と善意	038
第四章	はじめての敗北	049
第五章	陵辱手術	090
第六章	蝕まれる日常 壊れた理想	123
第七章	少女の願い	202

登場人物紹介

Characters



さぎざわ えりか
鷺沢 江梨香 / セラフィックナースエリカ

私立ヘルメス学園の生徒会長にして、怪物化したデモナ病患者と戦い治療する「セラフィックナース」に変身する少女。

ひかわ れいこ
氷川 麗子

デモナ病療養施設の代表。メガネをかけ、妖艶な色気を振りまく女医。

みやもと
宮元

江梨香を慕う後輩の少年。デモナ病療養施設に入所している。

きりやま
桐山

デモナ病医療養施設のメンバー。痩せぎすで学者肌の医師。

ダーム

筋肉隆々の黒人医師。桐山とともに麗子の下で働いている。

上がらせている。デモナスレイブにぶちまけられた白濁によって汁染みを刻まれた白衣からは、ウィルス混じりの濃厚な性臭が立ち昇っていた。

「くうう……ん、くうっ！」

恥辱に身を振るも、手術台に拘束された身体は殆ど自由にならず、足台を動かすこともできない。両手をもがかせてもガチャガチャと手錠が鳴り、真上を向いている巨乳が悔しげに揺れるのみだ。か弱い天使の力では、強固な拘束具はビクともしない。

——ダメか……し、仕方ないわ。冷静になるのよ……今は焦ってもどうしようもない。深閑とした手術室に監禁された状態。漠然たる不安感が募る。とてもじつとしてなどいられないが、無駄な抵抗をして体力を消耗するのは愚策だ。才女は焦る気持ちを抑え、冷静に脱出の機会を窺うことにした。果たして、その好機はすぐさま訪れる。

「ふふ、ようやくお目覚めみたいねセラフィックナース」

自動ドアが開き、二人の医師が入室する。眼鏡をかけた美女医と、彼女に従う痩せぎすの男。二人とも白衣に身を包んでいるが、ただの人間でないことは気配でわかる。

「氷川先生……その気配。まだウィルスを浄化できていなかったんですか……？」

「ええ、詰めが甘かったわね。お注射だけじゃ治らない病気だつてあるんだから。しっかりアフターケアしないと立派な看護師にはなれないわよ？」

薄い笑みを浮かべ、勝ち誇る魔女医。浄化の矢を打ち込んで人間に戻せなかった感染者など、今までのいらない。デモナジェネシスの恐ろしさを再認識し、エリカは眉を引き締めた。

「もつとも、あなたの力は予想以上だったわ。本当、素晴らしい力よ」

「ええ、ええ。だからこそ、キミのその力を解明する必要があるのですよ驚沢君」

背後にいた男が、すつと手術台の横にまで歩を進める。

「申し遅れました。僕はメルクリウス医療団のメンバー、研究主任の桐山と言います」

「それを言うなら秘密結社メリクリウスの構成員……ですよね、ドクター？」

慇懃な挨拶に対し、少女はキッと男の顔を睨みつけ言い放つ。両手両足を縛り上げられた屈服体勢でも弱気だけは見せまいと、天使は勝気な態度を崩そうとしなかった。

「いかにも。ダーム君同様、僕も麗子様の下僕です。当然研究対象はデモナウィルス、そして感染した人間です。これからキミの身体も調べさせてもらいますよセラフィックナーズ……偉大なるデモナウィルスの力で進化した僕の、天才的な頭脳と手腕でね！」

声と同時に、人の姿が崩れた。後頭部が大きく伸長し、口は放射状の嘴になる。白衣が破れ、脇腹から何本もの複腕が伸び出した。無数の吸盤を備えた軟体触手は、まるでイカの触腕そのものだ。何本もの腕を蠢かす姿は、頭足類と人間との結合体にも見えた。

「では早速始めましょう。楽しい楽しい人体実験の時間です……ふひゃひゃひゃ！」

おぞましい性癖を吐露し、無数の腕を蠢かすマッドサイエンティスト。それぞれの手が同時に器具を操作し、準備を整える。无影灯が強烈な光を発し、被験者の目を焼いた。

——なんておぞましい姿なの……で、でも！

眩さに目をしかめながらも、エリカは凜気を振り絞る。先ほどデモナスレイブに遅れを

第五章 陵辱手術

はじめての敗北から数時間。気を失っていたエリカは、狭い部屋の中で目を覚ました。まず目に入ったのは、無機質な天井と、巨大な手術照明。無影灯から視線を横に移せば、点滴台や血圧計、ベッドモニタなどの器具が目に入る。

「こ、ここは……そうか。わたし、あれから……」

徐々に意識がクリアーになる。おそらくは療養所内の手術室——いや、その実態を考えれば組織の実験室というべきか。その中央に位置する分婉台に、少女はナース服を纏った変身姿のまま寝かしつけられていた。大きく背もたれを倒した、リクライニングシート型の分婉台だ。両手は頭上で一纏めに組まされ、手首に枷をはめられて背もたれに縛りつけられている。ブーツにもベルトが巻かれ、足を乗せるためのあぶみにガッシリと固定されていた。足台は左右に展開しており、健康的な太ももは大きく開かされてしまっている。

——なんて格好なの……。く、屈辱だわ……。

可憐な美貌に、羞恥の朱が差す。分婉台に縛りつけられ、膝を曲げたまま両足を開かされた拘束姿。まるでひっくり返されたカエルのような、無様で情けない格好だ。開脚されているせいでミニスカートが捲れがり、裾からは恥ずかしいデルタ地帯が覗いてしまっていた。白い下着は愛蜜の残滓でねっとりとしり、股間にへばりついて恥丘の造形を浮かび

とつたのは、宮元の治療を優先し手が出せなかったからだ。正面から戦えば、決して勝てない相手ではなかった。そして今、力を抑える必要はどこにもないのだ。こちらから接近する必要さえない。この身体に触れようものなら、浄化の輝きを至近距離から叩き込んでやる——聡明な少女は、その身を縛められながら勝利への活路を見出していた。

「では、さしあたってはその女性器から調べさせてもらいましょうか、くくく！」

器具が操作され、分娩台の足台が左右に開かれていく。抵抗したくても、機械の力には逆らえなかった。ショーツを晒していた股間がさらに大きく割られ、M字に大開脚されてしまう。ミニスカートが腰まで捲れ上がり、太ももどころか下半身の殆どが晒された。

「さて、女性器を診療するのに下着は邪魔です。では失礼して……ひひひっ！」

分娩台の真ん前に至近し、両手を伸ばす桐山。そこだけは人間と同じ細指が、太腿を意地悪く這い回った。瑞々しい肉感を確かめると、下着に指をかけ引き摺り下ろそうとする。

——くうっ……い、今よ！

手術灯の光の下、下半身を弄られる。羞恥と嫌悪に美脚が震えた。だが今こそ、狙っていた好機だ。肌と肌が触れ合う距離、浄化の光を叩き込むに十分な間合いだった。

「かかりましたねドクター！ お医者さんごっこはここまでです、エッセンスフレアー！」
恥辱を押し殺し、力を解き放つ浄化の天使。淡い輝きが全身を包み、光の奔流となって全身から放たれる。感染者にとっては決定打ともなる一撃が、至近距離から炸裂する。

「ぎゃっ!? うげ、ぎゃあああああ——ッ！」

浄化の一撃に、桐山は触手を暴れさせ絶叫した。変異した皮膚が、じゅうじゅうと爛れる。だが——よろめきながらも、タコ怪人は無事だった。

「ひい、ひい……ふふ！なるほどこれが浄化の痛みですか、いや勉強になりますねえ！」
「な……そ、そんな。どうして……！」

いやらしい言葉とともに、爛れた粘膜が再生する。勝ち誇る悪魔と対照的に、天使は愕然としていた。確実に浄化させるべく、全力で放った必殺技だった。なのにデモナスレイブを人間に戻すどころか、大した打撃さえ与えていないようだった。

「やはりね……ふふ。これでわたしの仮説がまた一つ証明されたわけだわ」
成り行きを見守っていた女医が、得意げに解説する。

「あなたのワクチンとデモナウイルスは表裏一体の存在。ワクチンがウイルスを浄化するのなら、その逆もまたありえるのよ。ウイルスたっぷりのダームのペニスとあれだけ密着して、精液をあんなにたくさんブチまけられて、無事でいられるはずがないじゃない」

——な……。そ、それって……。

恐る恐る、エリカは己の身体を見下ろした。手術用の照明で、コスチュームの様子が細部までわかってしまう。濡れたショーツに、身体に密着した看護服。汚い染みになるほど吸わされた白濁は、衣服を浸透して肌まで付着していた。股間に密着した状態でブチまけられた射精液など、パンティを染みて粘膜にまですり込まされている可能性さえある。

「そうです。利発な君なら理解していると思いますが、今のあなたはデモナウイルスに冒

され、セラフィッククナースの能力を中和されてしまっている状態というわけですよ！」

「な……う、嘘ですっ！ そんなことありません、わたしの力は……あ、ああっ!？」

唯一の頼みの綱であった浄化の力が使えない——それは、抵抗手段を完全に奪われたことを意味する。絶望的な現実を否定しようと再び力を振り絞る変身少女だったが、

——ああ……そ、そんな。力が、出ない……!？」

ワクチンが、意志に応えてくれない。浄化の輝きが放たれることは、もうなかった。

「今の反撃でなければのワクチンを使いきったようね。とは言え変身は解けていないし、デモナ病に感染した気配も感じられない。完全に無力化できたわけでなく、一時的に中和できているだけか……その辺り、まだまだ検証を重ねる必要があるわ。となれば」

「実際に詳しく調査して、データを集めねばいけませんよねえ。さ、実験再開です！」

力を失った囚われの天使に、悪魔の医師たちが手を伸ばす。今度は先ほどのように焦らすことなく、パンティを一気に押し掴みにされた。そして容赦なく力がかけられ——。

「い、いやっ。やめなさい、そ、そんな……ああああ——!？」

ビリ、ビリビリビリ！ 人外の力で、シルクショーツが無惨に引き裂かれた。絹が裂ける残酷な音と、恥辱に満ちた悲鳴が病室内で重なり合う。

「う、ううっ。あ、いや……っ!？」

下着を剥がれた恥部から、籠もっていた体臭がむわつと立ち上る。愛液の蒸れた恥匂に、初心な少女は声を詰まらせ恥じらった。美貌は真っ赤に染まり、羞恥に髪が震える。

そんな可愛らしい少女の清纯を、観察者の下卑た視線がいつそう汚辱する。

「ほう、これは美しい。左右対称、色素の沈着もない。粘膜もはみ出していませんし、陰核の大きさを肉唇の厚さもバランス良好。やや未発達ですが素晴らしい健康体です」

「く、ううううっ！ いや……そ、そんなに見ないでください……！」

研究者らしく冷静な、しかし欲情の籠もった視線でねちねちと視姦され、事細かに寸評される。たまらない羞恥と恥辱に、ナースは奥歯を噛み締め恥じ入った。

品評の通り、エリカの秘部は綺麗なものだった。熟れた肉体に対し、少女らしく清楚な佇まい。陰毛は少なく、肉付きも薄めだ。発達が遅れ気味なのは、殆どオナニーさえしていないからだろう。初々しい処女門は、透き通るような白さを保っている。まさに天使の持ち物に相応しい、清艶な幼苑だ。だが先ほどの陵辱でたつぷりと搾られた愛液はまだ生乾きで、肉の割れ目を淫靡に照り光らせている。そのギャップが、酷く背德的だった。

「さほど発達していないわりに感度は良好のようで、愛液の分泌量は平均以上ですね」

M字開脚で晒された恥部を、執拗に注視される。咄嗟に股を閉じようとするエリカだったが、足台に拘束された両足は少しも動かせず、視姦されるがままになってしまふ。

——くう……こ、こんな辱め……。で、でも……まだ！

気高い矜持が軋みをあげる。もう、恥ずかしくて死んでしまいたいぐらいだ。だが漏れそうになる悲嘆を、天使は必死で押し殺した。恥辱に涙を滲ませながらも、勝気な瞳は抵抗心を失っていない。苦境は否めないが、まだ勝機が失われたわけではないのだから。

麗子は言っていた。セラフィッククナースのワクチンは、一時的に中和されているだけだと。時間を稼ぎ細菌さえ駆逐すれば、また浄化の力は取り戻せるはず——ならば、その時まで耐えるしかない。少女の強固な意志は、僅かにも折れてはいなかった。

「くうっ……じ、実験でもなんでもしなさい！ でも言っておきます、あなたたちに何をされても、セラフィッククナースはそんなものには絶対屈しないんですから……！」

怪人を睨みつけ、気丈に言い放つ変身ナース。ただの虚勢だとわかっていても、毅然とした態度で意気を昂揚させる。いつもと同じだ。叶いそうにない目標も馬鹿げた理想も、エリカ——江梨香はそうして実現させてきたのだ。真摯な決意が、綺麗な瞳に灯っていた。

「ふふ、負けん気の強いコね。その意志の強さがワクチンの力の源なのね。でも、そんなあなたを虐められると思うと……くく、楽しくて楽しくてウィルスが疼いちゃうわあ」

いつの間にか接近していた麗子が、残忍な微笑を浮かべる。同時、ずるずると何かがのたうつ音がした。女医のスカートが捲れ、裾から異形の器官が伸び出す。両足の付け根から生え出た、太く長い肉蛇。先端は蛇の鎌首を思わせる形状に膨らみ、頭部に空いた穴口からはトロトロと白濁した涎が零れている。その姿は、奇病に冒された男根にも見えた。

「ふふっ。ねえエリカ。その可愛らしいおマ○コじゃ、あなたまだ処女なんですよ？」

「！ こ、答える必要なんてないです……！」

耳元に、熱い息をかけられながら囁かれる。恥辱にふいっと首を背ける少女だが、どう

答えようが同じことだった。可愛らしい幼門に、肉蛇の亀頭が押し当てられる。

——うあ……そ、そこ……！

剥き出しの秘部に、妖しい感触が駆け抜けた。先走りじみた毒蜜で、異形の肉槍はすでにヌルヌルと濡れている。とろみがかかった分泌液を塗りたくるように、男根触手が緩やかな往復運動を開始した。慎ましやかな幼裂を、粘濁ペニスが何度も何度もなぞり上げる。

「ふ、あく……っん！」

股間を走る嫌悪感と、そして甘い悦び。秘裂をくすぐる上下運動に、先ほどダームに施されたスマタの悦びが反芻される。漏れそうになる喘ぎを、少女は咄嗟に嘔み殺した。

醜悪な外見とは裏腹、麗子の触手は心地よい感触を持っていた。本体が女性だからだろうか、肉質は柔らかくしなやかで、表面はスベスベときめ細かい。まるで、若い女の太もものように滑らかな触り心地だ。その柔媚さはダームの剛茎とは大違いで、妖しい背徳感さえ感じてしまう。そんな気持ちいい牝触手が、鋭敏な割れ目を優しく可愛がってきた。

しゅ、しゅ、ちゅっ……。さしたる力は込められず、いたわるように愛撫される。だが、未開発な肉体には逆にそれが辛かった。未成熟な性感は、くすぐったさや焦れったださにとどまらず、うしろも弱いのだ。塗られる粘液のトロトロも、粘膜に染みて心地よい。

——く、うううっ。卑怯よ……こ、こんなに優しくしてくるなんて……！

痛みや屈辱なら、心を燃やして抵抗もできる。だが女悪魔の手管は、その抵抗心そのものを蕩かしてしまう狡猾なものだった。甘く優しく、恋人同士の愛撫のように心地よい摩



擦。触手スマタの繊細な動きに、いまだ経験のない処女丘さえも蕩かされてしまう。

だが氣遣うような甘撫は、同時に残酷なほどしつこかった。快感にたまらず腰を引いても、すぐさま追撃されて許してくれない。かといってそれ以上のお仕置きはせず、常に一定のペースで緩やかな摩擦を続けてくるのだ。休みなく繰り返されるもどかしい愛撫は、少女の官能に甘い毒を着実に溜め込んでいく。まさに、蛇のように執拗な淫ら責めだ。

「どう？ わたし、女の子の身体が大好きなのよ。何人も患者を食べてるわ……だからすつごく上手でしょ？ 氣持ちいいでしょ、恥ずかしいところがウズウズしちゃうでしょ？」

「っふ、ん、ふうう！ そ、そんなこと……ありません……っ！」

ぎゅつと菌莖を噛み締め、あくまで強氣を貫く被辱のナース。だが同性ならではの弱みをついた熟達のレズ責めは、性経験のない小娘に耐えられるものではない。M字開脚の太ももは心地よさそうに痙攣し、手袋に包まれた指先は切なげに痙攣していた。

「いけませんよ鷺沢君。医者に逆らうような看護婦には、お仕置が必要ですよえ」

それでも健氣に抵抗する少女に、もう一人の医師が襲いかかる。イカの触手が伸ばされ、Dカップの巨乳にとぐろを巻いた。フェティッシュな白衣を引き伸ばしながら、肉紐がぎゅうつと肉にまでめり込まされた。軟体動物そのものの不気味な感触が、コスチューム越しに伝わってくる。幾重にも巻きついた触腕が、ぐねぐねと蠢いて柔乳を揉み解してきた。

——うあ。ダ、ダメ……む、胸まで一緒なんて……！

両胸に走る危機感、そして期待感。やはり、エリカにとって胸は弱点だった。スーツ越

しに締め上げられると、鋭敏な性感はそれを素直に気持ちいいと感じてしまうのだ。

イカ怪人の触腕は、ダームのゴツゴツした指とも、麗子のしなやかな触手とも違った感触だった。軟体状の肉鞭は常に変形を繰り返す、まるで掴みどころがない。なのにその芯はしっかりと力強く、むぎゅ、むぎゅと乳房をきつく絞り上げてくるのだ。不気味な粘感と同時に逞しい力強さを味わわれ、鋭敏な肉鞭にマゾヒスティックな悦びが駆け抜ける。だがそんな質感以上に危険なのが、裏側にびっしりと生えた吸盤の存在だった。

「どうですか僕のマッサージは、気持ちいいでしょう。たっぷり感じてリラックスしてくださいね、そのほうがこのあとの実験もスムーズに進行できますから」

「ふう、う……冗談言わないでください。こ、こんな気持ちよくなん……ふあああ!」

あくまで強気を貫き、抵抗心を剥き出す正義のヒロイン。生意気に聳える砲丸巨乳で、突然強烈な快感が幾つも弾けた。小さな口に、同時に乳肌を吸い上げられたのだ。

——な、何……何これ!? 胸きつつ……す、吸われてる……!?

推測の通りだった。おっぱいを包囲した肉蛇、その裏側に密集した無数の吸盤が、同時に吸引を開始した。きつく巻かれた触手は、スーツにめり込み肉に食い込むほど乳房に密着している。そんな状態で吸盤に吸い上げられ、強烈な痛痒感を抑えられない。

「く、ふ、ううううっ! こんな、す、吸われて……うあ、あ、うう!」

ちゅるっ、ちゅぱ。ちゅぱちゅぱちゅるッ! 吸いついては離し、またすぐ吸引される。まるで、幾つもの唇に肉肌を啄つばまれていくようだ。今まで感じたこともない異形の乳悦

に、顔を震わせ感じ入る白衣の天使。唇を噛み締めても、甘い喘ぎが漏れてしまう。

「あらあら、気持ちよさそうに喘いで。やっぱり胸が弱いのかねあなた。まあ、そんなにエッチなおっぱいしてれば当然か……ふふ。見なさい、こんなに愛液溢れてきたわよ？」

にゆるっ、にちゅ。スマタを続けていた触手ペニスが、一旦股間から離された。粘っこの音を引き、粘液の橋がかかる。糸を引く蜜液の正体は、触手から放たれる先走りだけではない。ひくひくと開閉を繰り返す幼裂から、粘ついた愛蜜が糸を引いているのだ。

「やっぱりあなた、愛液の分泌量が過多みたいね。カルテに記帳しておくわ……ふふ」
——く、うう。なんて辱めなの……。く、屈辱よ……。

あまりに恥ずかしくないすぎる診断に、純情少女は顔を俯け恥じ入った。一旦は秘裂愛撫から解放されたエリカだったが、被虐の検体には羞恥に悶えている余裕さえ与えられない。

「おっと麗子様、失礼を。貴重なサンプルです、この機に採取しておかなければ」

ねちっこく乳房をマッサージしながら、桐山が新たな肉蛇を伸ばした。これも頭足類の触手に酷似しているが、生えている吸盤は一つだけ。だが、そのサイズが凄まじかった。胸に吸いついているものより何倍も大きく、ラップ状に大きく膨らんでいる。吸引機じみた巨大吸盤が、ひくつく恥丘全体をすっぽりと覆うように押し当てられた。

「ひああ……ふああうっ！」

ぬるっ、きゅぼん！スマタの余悦にひくつき続けている幼淫に、凄まじい吸引力で吸いつかれた。ミニスカートから露に晒されている股間が、余すところなく覆い隠される。

変異巨根を臆面もなく褒めそやしながら、エリカはドッグスタイルでの挿入に乱れ狂った。愛液まみれの膣がきゅんきゅんとうねり、極太ペニスを締め上げ慰める。これまでたつぷりと分泌されていた愛蜜が、ローションのようにヌルついて性感をいや増した。

「おおお、すげえ締めつけ……自分から吸いついて、膣襲動かして絡みついてくる。さっすがエロナースの持ち物だなあ……くうう、搾り取ってきやがるぜ!!」

幼子のように狭隘な締めつけと、痴女のように熟しきった蜜壺の奥深さ。開発された淫乱穴の味わいに、男子学生は喜びの声をあげた。精液を搾取すべく、無数の髪がうねってペニスを愛撫する。献身的すぎる奉仕穴に、患者は強烈なストロークを見舞ってやった。

「くあ、つはひ！ は、激しいです……そ、そんなにされたらあ、だめ、らめええーっ！」
ずぶっ、ずぶっずぶっ！ 獣のような勢いで腰が振られ、何度も何度も抜き差しされる。バックからのピストン責めに、エリカは長髪を振り乱しよがり狂った。身体を支えている四肢が辛そうに痙攣し、スーツに包まれた巨乳がぶるんぶるんと揺れまくる。

「へへ、おっぱいもすげえぜ。なあ看護婦さん、おっぱいで又いてもいいッスよねえ？」
「そうそう。どうせ精液出すだけだし、問題ないですよねえ看護婦さん？」

バックからの挿入で乱れまくる淫乱ナースに、左右から一人ずつの学生が迫った。右に左に躍る大迫力の胸乳に、スーツの上から巨大な肉棒が突きつけられた。

「ああっ、だ、ダメですよおっ、そんな検査の仕方不許可ですっ！ そ、そんなとこで出しちゃったら精液溜められないっ……け、検査できないじゃないですかあ……」

「心配性だなあ、大丈夫ですって。何なら後でまた口なりマ○コなりに出しますから！」
「そ、そんなあ……酷いですう。そんな勝手なことやめてください……ひううんっ！」

欲情に突き動かされる男たちは、検査に協力してやるつもりなど微塵もない。涙声での懇願をまったく無視し、左右から一本ずつの肉槍が乳房に食い込まされた。病原菌まみれの粘濁が白衣を汚し、勃起した男根の硬さと熱さをスーツ越しに教え込まされる。

「ひあ、ああつ！ お、おちんちん、おっぱいに食い込んで……んあああ……！」
力任せに硬棒を押しつけられ、形のいい乳房が醜く歪まされる。母性溢れるDカップの美乳は、乱暴な扱いにも優しく応じてペニスを包み込んだ。エナメルスーツの滑らかな触感と、乳肉の蕩けるような柔媚さが、男の性感を甘く刺激する。男子たちは激しく左右から腰を振り、剛棒で乳房を抉るようにして擦りつけてきた。

「あ、あはあああつ！ ダメですつ、わたしおっぱいは弱いんです、刺激されたらダメなんです。なのにそんなに激しくされちゃったらあ……はうう、んっひいひい……！」

デモナウィルスの影響を受け、エリカの巨乳はさらに鋭敏さを増していた。これまでの羞恥で性感を高めた媚峰は、充血しきって普段よりいっそう弱くなっている。そんな弱点を硬い肉槍で虐められ、凄まじい乳悦が両の急所で燃え上がる。耐え難い快楽に、エリカはぼろぼろと涙を零しながら身体を揺すって悶え泣いた。

——だ、だめ！ おっぱい感じすぎちゃう……こんなのため、も、耐えられない……！
やはり、乳房は少女の最大の弱点だ。ぐいぐいと肉槍で抉られるたび、それだけで意識

が消えそうな乳悦に苛まされる。たまらず乳房を揺さぶって身悶えれば、勃起した乳首がスーツと擦れてさらなる切なさ追い詰められた。進む快楽に腰を捻れば、バックから挿入されている剛茎と膣壁が擦れてたまらない虐悦を味わわれる。両胸と牝穴、焦れきっていた最も鋭敏な三箇所を同時に可愛がられるのは、正気が消えてしまふようなほどに気持ちよかった。目を瞑り歯茎を噛み締めて快楽に耐えようとするとエリカだったが、ずっとごと激しくピストンされると歯の根を噛み合わせることまでできず喘いでしまう。

「ああ……んあああ！ ダメ、ダメですよ……こ、こんなの。んあああ、こ、こんなの気持ちよすぎますっ……ああ、検査しないとイケないのに……らめですよー！！」

ピンクの髪を振り乱し、美尻を揺すって乱れまくるセラフィックナース。乱暴に犯されるのなんてイヤなはずなのに、さっきのオナニーより何倍も気持ちいい。指では絶対に届かない箇所まで硬い肉槍で貫かれ、遠慮がちな愛撫では得られなかった虐悦でおっぱいを焼き尽くされる。めちゃくちゃに罵られる陵虐行為に、マゾヒスティックな恍惚が止まらなかつた。悦んだ膣がきゅんきゅんとうねり、ペニスをきつく締め上げて愛撫する。舌を突き出し喘ぎまくる精液まみれのアへ顔は、被虐の悦びに蕩けきってしまった。

「へへ、すげーエロい顔。チンコ突っ込まれた途端素直になりやがって、可愛いヤツだぜ」「犯されて悦んでやがらあ。これがあの高飛車な鷺沢会長とはねー、嘘みたいだな！」

「ま、俺は今の鷺沢さんのほうが断然好きだけど。変態マゾでエロエロだし、へへ！」
白衣を揺らし乱れまくる変身少女に、観客たちの欲情が容赦なく注がれる。犬のように

惨めな姿勢で犯されるアイドルの姿を見つめながら、自分でペニスを扱く者も大勢いた。

「んああ……だ、だからあ、それは言わないれくださひつ。わたしはセラフィックナースエリカなんです、こ、これは皆さんを治療するための医療行為で……んふああああそんなに突かないれえ、んひつ、深いのおお、す、すごひれすううーッ！」

熱視線と侮蔑の言葉で心も身体も滅多刺しにされ、ゾクゾクする被虐感が駆け抜ける。そんな自分が惨めで情けなくて、それでもなじられるのが嬉しくて、様々な感情の雫がぼろぼろと零れ出す。涙に霞んだ視界に、またも接近してくるペニスが映った。

今まで相手をしてきた男のモノのどれと比べても小ぶりで、未成熟な包茎だった。皮を破りながらも一人前に勃起している姿が、なんとも健気で可愛らしい。

「あ、あう……。ま、また……患者さんのおちんちんです……。♪」

肉欲に冒された少女は、朦朧とした意識でそれを見つめていた。苦しそうに痙攣する肉棒を見ていると、早く薬にしてあげたいという歪んだ奉仕精神をくすぐられる。献身的な想いに駆られながらも、むせ返るような発情臭と熱気に、ごくつと喉が鳴ってしまっていた。はしたなく涎を零す口の真ん前に、皮を剥きかけた勃起幼根が突きつけられる。

——あ……ま、また舐めさせられるのね。精液一杯出されて、それをお口に溜めて……。自虐的な思考が、背徳の悦びを加速させる。しゃぶらされる。含めないぐらいのミルクを注がれて、溜めたそれをコップに注ぐ変態的な排泄行為を皆に披露してしまうのだ。

そんな惨めすぎる自分の姿、そして視姦されながら罵倒される未来を想像すると、どう

しようもなく興奮してしまふ。欲情に突き動かされ、お口が開いて舌が勝手に伸び――。

「はう……ん。キミも、し、してあげますね……ん♪　ちゅ、んむう……」

舐めさせられる、どころではない。恥知らずにも、エリカは自ら包茎キャンディーにしゃぶりついてた。可憐な唇で亀頭を頬張り、ぺろぺろと舌を伸ばして舐めしゃぶる。

「ぎゃははは、なんだコイツ。犯されながら自分でチンコしゃぶりにいつてるぜ!」

「うっわ、仕事熱心で献身的って言えば聞こえはいいけど、自分からちんぽ啜えにくぐらい淫乱だと俺は流石に引いちゃうなあ。やりすぎだよ看護婦さん?」

「う、ううう……そんふあ。エリカ、患者さんが心配なだけなのに……ん、ちゅ……!」

聞くに耐えない――いや、ずつと言つて欲しかった酷い侮蔑を心に刻みながら、エリカはひと口サイズのソーセージを貪り続けた。包皮に溜まっていた恥垢が、おぞましくも芳しい。恥辱と言う最高のソースが、幼根の味わいをいつそう美味なものとした。髪を振り乱しながらゆつくりと首を前後させ、竿全体を抜き上げる。舌を大きく動かして、わざと涎の音を立てながらいやらしくフェラチオに没頭する。

――も、もつと。もつと見て……もつと口汚く罵つて。こんな、変態のわたしを……!

四つんばいの身体を震わせ、おっぱいを揺らし痴態を見せつける。嘲笑を浴びせてくる男たちを上目遣いに見上げ、色目を使つて媚びまくる。

「んふう……ん、ふふふ♪　ちっちゃくて、可愛いけど……ん、美味しいです……ちゅ」

マゾヒスティックな恍惚の中、エリカは墮天使の笑顔を浮かべて肉欲にはまり込んでい

く。そんな彼女にかけられる言葉は、彼女が望む以上に絶望的なものだった。

「さ、鷺沢センパイがそんな笑顔で……。これが、本当のセンパイなんですか……。？」

「え……。ふあ？　ち、違いまふよお。わたし、セラフィックナースエリカでふ……。ん!?」

なじられて、ゾクゾクする。声の主は、今ご馳走になっている可愛らしい包茎の持ち主だった。嘲笑とは違う、哀しみを孕ませたその声に、エリカははっと上を向く。

そしてその姿を認め、潤んだ瞳を驚愕に見開いた。

「あ、ああ……。あ!?　み、宮元くん……。っ!?」

そこにいたのは、ただ一人自分のことを理解してくれた少年。不器用だけど一生懸命な自分を認めてくれた、大切な男の子——宮元少年だった。

「センパイ、最低です……。み、見損ないました。いつも一生懸命で、カッコよくて、ボクの憧れだった鷺沢センパイが……。こ、こんな変態だったなんて！」

「あ、ああ……。あああっ！」

何かが、大きく音を立てて崩れた。こんな姿、この少年にだけは絶対見られなくなかった。この子にだけは、見捨てられなくなかった。だがそんな願いは、最悪の形で碎かれた——いや、自らの手で碎いてしまったのだ。唯一自分を理解してくれた、かけがえのない少年の心を裏切ったのだ。

——ああ……。み、宮元くん。わたし……。な、なんてことを……！

心を救うどころか、少年の純心をスタスタに傷つけてしまった。自分を見下げる宮元の

目は、ただの欲情だけでなく悲哀に満ち、それがゆえにいつそう少女の心を傷つけた。

男子たちにはどれだけなじられても平気だったのに、この視線には耐えられない。

「ち、違う……んちゅ。違うんですう！ 江梨香じゃなひ……い、今のわたしは看護婦さんね、だ、だからこうやつへご奉仕しなひといけなふて……そ、それで……ちゅ」

すべてを変身のせいにして、みっともなく言い訳する。篤実な生徒会長を冒瀆するかのような、あまりに不誠実な態度。そんな背信行為が、宮元少年を激怒させた。

「そうかよ……センパイは実直な方だと思つたのに。こんな裏表のある人だつたなんて……畜生。なんだよセラフィックナースつて……センパイじゃないだつて？ 畜生が！」

「うあ……い、いやあ！ そ、そんなこと言わないでくださいあ……んう、ん、んっんっ！」

憎悪と憤激を栄養に、少年の中のデモナウィルスが勢いを増した。包茎ペニス皮を被りながらも肥大化し、性悪ナースの口壺をぱんぱんにしてお仕置きする。お口を一杯にされて言い訳もできず、エリカはいいやと腰をくねらせて身悶えた。

——あ、ああつ。わたし……宮元くんにまで。わたし、もう、もう……！

本当に大切な人にまで見捨てられた。年下の少年に見下されて、惨めで情けなくて泣きたくなる。そんな現実から逃れるために、不実な少女は眼前の快樂に溺れ込んだ。

「んふう……ん、んう。んっちゅう……んぷあ。あ、はあ、はむ……んっ！」

視線を合わせないようにしながら、一心不乱に包茎怒張を舐めしゃぶる。心通わせた少年の味は、やはり格別だった。あまりの美味しさに、ほっぺが落ちそうになる。

「ああっ……こ、こんな。ふぁ、宮元クンの美味しすぎ……んちゅ、ん、ちゅぷ！」

背徳感と絶望が、最高の調味料となる。燃え上がる被虐心に逆らえず、エリカは涙を零しながらフェラチオ奉仕に没頭した。惨めなのに、哀しいのに、美味しくてやめられない。現実逃避しながら幼根の味に溺れる年上の少女。その姿はあまりに惨めで情けなかった。

「そんなに嬉しそうに媚びて、一生懸命にボクのチンチン舐めて……畜生！ センパイ……いやセラフィックナースエリカ！ お、お前なんてメチャクチャにぶっ壊してやる！」

憧れていた、いや淡い恋心を抱いていた少女が晒す、救いようもない淫らな姿。裏切られた怒りと絶望が、デモナウイルスによって攻撃的な衝動へと転化する。ナースキャップを両手で掴んで固定すると、宮元は子供とは思えない勢いで激しく腰を振り始めた。

「んふ……ん、んぶうう!? ひ、宮元クン、激しすぎ……んぶう、苦ひいいい！」

ぐぼ、ぐちゅっぐぼっぐぼ！ 怒りの肉槍が、情け容赦なく口壺を滅多刺しにする。頬粘膜を抉られ喉奥にまでペニスを突っ込まれ、長大なストロークで抜き差しされて虐められまくる。あまりの激しさに、ガクガクと顎が揺れてピンクの髪が振り乱れた。

「は、激しっ……んぶぁ、も、もっと優しくしへくださひ宮元クンッ♪ こ、こんなに乱暴にされはらぁ……エ、エリカのお口、壊れちゃひまふううー！」

「は？ そうだよ、壊れろよ。この淫乱ナース……お前なんて大ッ嫌いなんだよ！」

この期に及んでおねだりしてくる恥知らずに、宮元は怒りに任せたハードストロークをぶち込みまくる。少しも少女のことなど考えない、まさに口壺に対するレイプだ。

喉の奥まで乱暴に犯されるイラマチオに、エリカは涙を流し苦悶した。同時、心通わせていた少年に乱暴に虐待されることに、マゾヒスティックな悦びがいつそう加速する。子宮が痛いほどに軋み、大量の愛液を噴き零して悦びまくる。膣はきゅんきゅんと締め上げを増し、バックから突き刺されている極太ペニスをきつく締め上げ愛撫していた

「おおつ、すげえ締まる……へへ、看護婦さんはシヨタ趣味かよ。それで毎日病室通いだつたわけだ。下級生に責められてメチャクチャ燃えてやがらあ、変態が！」

「ひゃ、んぷっ。ちがふの、み、宮元くんだけは特別れ……ひああ、深ひいゝッ！」

ズゴ、ズゴズゴズゴ！ 色情狂の分際でこの期に及んで清純ぶる奉仕奴隷を、後ろの男も激しいピストンでお仕置きしてきた。四つんばいの姿勢で前後同時に串刺しにされ、逃げ場のない虐待が身体中を駆け巡る。バックから突き上げられる圧迫感とお口から飲み込まれる虐待に、変身ナースは四肢を突っ張らせて悶絶した。

「あう、んぷうううう！ は、激しすぎまふう……こ、こんなにされふあら壊れちゃいまふう！ お願ひつ、も、もつと優しく可愛がつへえ……ひあああ、すごひいひいゝゝ！」

メチャクチャに嬲られることに、マゾヒスティックな喜びを覚えてしまう淫乱ヒロイン。貫かれながらも自ら腰を捻り、舌を閃かせて愛しい少年を慰める。

「誰が優しくなんてしてやるかよ！ こうして欲しかったんだろ変態ナース。いつつもあんな薄っぺらい笑顔浮かべて……本当はメチャクチャにされたかったんだろ、ああ!？」

「ひ、ひいひい……い、いやあ。言わなひれえ……だつへ、わたひは、わたひは看護婦さん

だから仕方なくっへ……んああしゅごい、ふ、深いっひいひいひいっ！」

ズブツ、ゴブゴブ！ 犬のポーズで真正面からペニスを抜き差しされ、咽喉深くまでストロークされる。ナースキャップを掴まれた顔を動かされ、口壺全体で怒りの肉槍を舐めさせられる。大好きな少年に自分の口を玩具扱いされ、エリカは被虐の魔悦に悶え狂った。「はは、すごい声。真面目に振る舞って溜まってたんでしょ、乳首もコリコリだぜ！」

乱れ狂う白衣の天使を、男たちが乱暴に責めまくる。左右から乳房を責めていた男子たちは、スーツをぼっこりと押し上げている乳首に責めを集中させた。淫らなぼつちを押し潰すようにペニスを押しつけ、亀頭部分で乳豆を何度も何度も擦りまくる。

「はう……んひ、んひいいい！ ち、乳首らめれす、そ、そこは感じすぎちゃうところなんですう！ そんな気持ちいいところばっかり虐められたらあ……んぷあ、あつああ〜！」
ただでさえ感じやすいおっぱい、中でも一番敏感な急所をコリコリと擦られ、たまらな
い切なさに打ちのめされる。スーツの薄生地越しに感じる勃起根の感触と硬度が、鋭敏な
乳腺にまで伝わってきた。たまらず身悶えれば乳房が左右に揺れ、いつそうの激しさで擦
れあってしまう。どうしようもない乳悦に、乳辱の天使はあさましくよがり悶えるのみ。

「この淫乱看護婦め……乱暴にされてそんなに悦んで。畜生、畜生畜生畜生ッ！」

恥知らずな初恋の少女に、宮元は憎悪を込めてお仕置きを喰らわしてやる。ナースキャップをわし掴みにし、挟り込むようにして肉槍を突き立てる。快楽を得るためでなく痛めつけるための口辱だったが、自虐マゾの変態痴女はそんなものにさえ感じてしまっていた。

——ああ、お口メチャクチャにされてる……わたし、み、宮元くんに虐められてる……宮元くんのおチンチン、硬くて熱くて……ああ、すっごく怒ってる……！

好意を抱いていた相手に蔑まれ、蹂躪されている。そんなどうしようもない惨めさに、マゾヒスティックな倒錯悦を覚えてしまう。少年の純情を裏切ってしまったという罪悪感が、被虐の恍惚をいつそう甘美なものにした。

「ご、ごめんなさい宮元くん……んちゅっ。わたし、ごめんなさひ、ごめんなさひ……！」
自然と、謝罪の言葉が漏れた。純心と肉欲とが混濁し、ぺろぺろと舌を動かして怒りの肉槍をなだめすかす。媚びたような視線でペニスをつエラチオ奉仕を続けるナースの姿は、献身的でありながら冒瀆的なほどにあさましかった。

「はっ、あくまで看護婦のまま検査を続けるってわけかよ……畜生、だったら協力してやるよ！ 変態ナースに似合いの化粧で、その顔ドロドロにしてやるよっ！」

快楽と憎憤が、少年の肉棒をパンパンに肥大化させる。自分からむしゃぶりついてくる淫乱痴女から力任せにペニスを引き抜くと、宮元はその怒りを眼前でぶちまけた。

「んあ……や、やあん。抜いちゃらめえ……あぶああああっ!？」

ぶしゃ、ぶっしやあああああ！ 口寂しさに悶える少女に、至近距離から怒りの顔射が見舞われた。ウィルス混じりの濃厚なザーメンが、可憐な童顔を白く染めていく。

「んぶあっ、いや、んあああっ！ み、宮元くんにお顔犯されてるう……ううう！」

愛しい少年から、欲情の証をぶちまけられた。濃厚な臭いと火傷しそうな熱さに、顔面

中を汚しまくられる。愛しい少年のモノでマーキングされる悦びに、舌を突き出してよがりまくる変態ナース。恍惚と被虐に、子宮がきゅんきゅんとうねりまくる。

——あ、ああっ！ ダ、ダメっ。こんなの……も、もう……！

お顔もアソコもおっぱいも、気持ちよすぎて耐えられない。男の欲情をたっぷりと染み込まされ、生々しい匂いと熱気に理性を焼き焦がされる。

「ひあああ、ら、らめっ。わたひ、もう、もうイッ……！」

イってしまふ——みんなのしている前で、またしてもあさましいイキ姿を晒してしまう。ゾクゾクする被虐感に意識が消えそうになった刹那、

「はは、ガキに顔射されてイキかけてやがる。いいぜ、俺も出してやるよ……おっぱいにも思いつきりぶっかけてやるぜ、おらおらおらあ！」

「え、えひああ……あああっ！ そ、そんな……んひいひい！」

どば、どばどばどばどばあああ！ 乳首に擦りつけられていた勃起根が、左右同時に炸裂する。どばどばと噴き出す粘濁が天使の白衣を汚し、スーツ越しに充血乳首を焼き焦がす。絶頂直前で叩きつけられた汚辱感に、エリカは腰を振りたくって悶え狂った。

「おお、すげえ腰使い……し、搾られる！ ダメだもう出るぜ……へへへ、約束通り膣中にたっぷり出してやるからよ、一滴残らず受け止めるんだぜ看護婦さんよお！」

「ひ、ひあああ!? な、中はらめれふ、中は許しへ……あは、あはひいひい！」

ぶばああ、どっぱあああああああ！ バックから突き刺されているペニスからも、欲情

の証がぶちまけられた。ピストンされながら奥の奥にマグマをぶちまけられ、お腹の中を濃厚な子種で埋め尽くされる。

「あ、ああっ！ 出されへる……熱いの、中にいっぱい出されへるうううう！」

子供を作る場所を、知らない男の精液で汚された。耐え難い絶望が、少女をズラズタに引き裂く。だがそんな罪悪感よりも、身を焼く虐悦はなお深かった。飢えきつていた膣奥に嬉しすぎるプレゼントを注ぎ込まれ、絶頂直前の淫乱ボディが耐えられるはずがない。

——あ、あああ！ ダ、ダメッ。もう、わたし……もう、もう……！

顔面。秘奥。左右の乳房——前後左右から同時に汚濁をブチまけられ、逃げ場のない悦虐に追い詰められる。男の欲情を全身で受け止めながら、少女の意識が蕩けていく。

「イクッ……んぶあ、あひいいい！ いっぱい、いっぱいみんなに出されながらあ……エリカ、みんなに汚されながらイっちゃいまふうううう！！」

ぶしゃ、ぶっしゃああああ！ バックからこじ開けられている結合部が決壊し、愛液と白濁を一緒に噴出する。少年のミルクを滴らせる細頸を限界まで仰け反らせ、あさましい声でイキ狂う変態ヒロイン。喉を仰け反らせ絶叫するアへ顔目がけ、少年のお仕置きがどばどばとぶっかけられる。

「この淫乱看護婦め……おらっお仕置きだ、その顔メチャクチャに汚してやるッ！」

「んぶあ……あぶう、んぶうううッ！ ダ、ダメれふ宮元クン、んんっ！ お、お口に注いでくださひ……お願いしまふう、お、お口に出して、検査に協力してください……！」



ぺろりと、蛇のように舌なめずりするデモナジェネシス。萎んでいく二人と対照的に、魔法の肌は色艶を増す。女幹部にとって、自分以外の存在はすべて利用すべき劣等種に過ぎない。麗子は役立たずの部下の生命を吸収し、自分の盾としていたのだ。

「あなた……な、なんてことを！ 命を、一体なんだと思ってるの……！」

桐山もダムも、憎むべき悪だ。だが、命の尊さに代わりはない。しかしこいつは、その生命を軽んじたのだ。医師にあらざるやり口に、エリカは義憤を燃やしていた。

「ふん、敵に同情してるの？ 本当、どこまでもお人よしなコね……そんな余裕があったら自分の心配をしなさいよ。今からあなたも、こいつらと同じ目にあうんだからね！」

大の字に拘束した獲物を、髪触手が縛り上げる。グラブがめりめりと締め上げられ、両手を左右限界まで開ききられた。ぶるんと揺れた二つの美峰に、魔法の両手が迫る。掌では包みきれないDカップもの巨峰を、しなやかな指先がコスチューム越しに揉み誇る。

「つく、ううっ！ 何をするの……やめなさい！」

動きを封じられて、なお強気を失わない変身少女。抵抗心に応じ浄化の光が煌めくも、先ほどの一矢で殆どの力を使い果たした現状、力を増した女怪人を退けることはできない。それでも屈しまいと生意気に屹立する美峰を、魔法医は触診するかのようには撫で回してき。密着スーツに指を這わせ、軽く埋めては焦らすように優しい愛撫を繰り返す。

——な、何のつもりなの。こんな……くう。や、優しくしてくるなんて……！！

激しい陵虐に身構えていたエリカにとって、拍子抜けするほど手^て緩い責めだ。だが、先

刻まで男子たちに乱暴にされていた女体にとつては、その優しさが逆に辛かった。優しくいたわるような指使いが、火照った乳房に心地よい。もどかして焦れつつたくて、気を張って耐えたいのに、その気概さえ蕩かされてしまうのだ。

「わたしは医者よ、人体の構造なんてすべて知り尽くしているわ。あなたのカルテも全部覚えてる。ふふ、どこをどうすれば感じるかぐらい、全部お見通しなのよ？」

「ふ、ふんっ！ 冗談を言わないで。そんな愛撫なんて少しも……くふううっ」

親指と人差し指で乳麓を挟まれ、そのまま円を書くようにおっぱい全体を揉み解された。気丈に吼えるも神経がリラククスしてしまい、どうしても力が込められない。凜々しく釣鐘型に張っていた肉峰は、甘い搾乳に蕩かされ従順にカップを崩し始めていた。

——く、ううっ！ こんな……わたしの身体、どうして……！

口では否定しても、女医の診断は適切だった。やはり、開発された巨乳はエリカにとつてどうしようもない弱点なのだ。コスチューム越しの愛撫で先ほどの乳悦が思い起こされ、再び乳房の奥が燃え盛ってしまう。擦られるたび乳肌を押しつけられる、裏生地の感触が切なかった。おっぱい全体が熱くなり、乳首が疼いて白衣に勃起姿を浮き立たせる。

「やっぱり身体は正直ね、乳首も勃ってきてるわよ。くく、もっと素直にしてあげる」

サディスティックに微笑むと、麗子は変形した髪触手を伸ばした。ピアノ線のように鋭く細いワイヤーが、快楽に応じて僅かに隆起している先つちよ目がけて迫っていく。

——く！ ち、乳首……くるっ！

鋭敏すぎる急所への攻撃に、ぎゅつと唇を噛み締めるエリカ。だが性感マッサージで解された媚峰には少しも力が込められず、逆に期待感だけがいや増してしまう。薄桜色のスーツを押し上げている性感帯に、極細触手がくるんと巻きつく。

「ん、ひっ……ひうん！」

そのまま、キュッと締め上げられた。鋼線のように硬くしなやかな触手が、コスチュームに皺を刻みながら食い込まされる。瞬間、肉豆に走る熾烈な鋭悦。痛み混じりの激悦に、少女は顔を震わせ苦悶した。

「ああ、いい声。あなた、やっぱり乳房は人一倍敏感ね……もつと虐めてあげるわ！」

カルテ通りに、一番脆い部分を集中的に責めていく魔女医。性感愛撫はそのままに、髪触手でギリギリと乳首を縛り上げる。容赦ない締め上げで、乳豆深くにまで肉鋼線が食い込まされた。痛みに怯える勃起豆をそのまま上下左右に引っ張って抓くり回す。

「ひ、ひぎっ！　ち、乳首きつ……痛アッ、つくひいいイイ！」

ピアノ線をきつく食い込まされたまま、鋭敏な弱点を上下左右に捏ねくり回される。果実を引きちぎらんばかりの陰惨な責めに、エリカは長髪を振り乱し絶叫した。

——い、痛……きつい！　ち、乳首取れるっ……ち、千切れちゃう……！

鋭いワイヤーは、スーツ越しにめり込んで乳豆深くまで食い込んでいる。誇張でなく、先端を切断されてしまいそうだった。だがなんとかしたくても、四肢束縛の肉蛇には逆らえない。悪夢のごとき虐悦に、巨乳を揺すって悶えまくる磔天使。ぶるんぶるんとおっぱ

いが揺れるたび、肉紐を食い込まされたスーツに過負荷がかかる。さらにはメス状の爪を思いつき突き立てられ、胸を包むコスチュームは無惨にも引き裂かれてしまった。密着スーツの締めつけから解放され、Dカップの裸乳がぶるんつと揺れる。

「ひあ、あ。やあぁ……っん」

乳肌を剥き出しにされ、羞恥に悶える磔天使。甘い愛撫に紅潮し、釣鐘巨乳はうっすらと紅潮し淫らに収縮していた。その先端では、小ぶりな乳首が苛烈な責めでコリコリに充血しきっている。膨張した果豆にはワイヤーがきつく食い込み、薄く血が滲んでいた。

「あらあら、痛そう。酷い症状……それじゃ、痛み止めのお注射しておきましょうね！」
小刻みに痙攣する痛ましい充血豆に、新たな髪触手が宛てがわれた。先つちよに絡みついているワイヤー型のもとの違い、先端が鋭く尖り針状になっている。注射針を思わせる先つちよからは、ピュ、ピュッと不気味な粘液が飛沫をあげていた。

「う、く……あぁ。これ以上、な、何を……」

乳腺に宛てがわれた凶器を見つめ、たまらず声を震わせる乳辱の天使。裸に剥かれた果肉に直接細紐を食い込まされ、陰惨な痛みで両の乳首はいっそう敏感さを増していた。

ふるふると怯えるように痙攣する弱点に、鋭い針が押し当てられ——ズブズブズブ！

「ひ、ひぎいいいいイッ!? ち、乳首につ……ンひいいいいイッ！」

硬質な毒針に、鋭敏な肉豆を穿り抜かれる。乳首貫通の激痛に、少女は背中を仰げ反らせ絶叫した。正確に乳腺を打ち抜かれ、鋭敏な乳粘膜を抉られる。鋭い痛みと異物感に、

両の巨峰がぶるんぶるんと揺れ躍る。

「本当、敏感な反応。でもまだよ。お薬をお注射するのはこれから……ふふふ！」

「ひ、あ、あぐううっ!? そんなっ、こ、これ以上何を……くふうううう!?」

乳首をピアッシングした針触手が、チューブのように緩やかに脈打つ。先端から迸る粘液。大量のデモナウィルスを含んだ毒薬が、注射針から乳管内へお注射されていく。

「ああ、あふううう！ 乳首っ、な、何か入れられ……くひん、あふああああ〜！」

じゅるっ……どぶどぶどぶどぶ！ 注射針から、ねどついた毒液が噴き出すようにプチまけられる。刺されただけでも辛すぎた弱点に、熱いお薬がたっぷりと注がれていく。

——ち、乳首の中に出されるなんて……ひああ!? ヌルヌルして、あ、熱い……ッ!?

乳腺の中に薬液を注がれる、未曾有の激感。無理矢理に大量の濁液を蓄えさせられ、乳房が破裂してしまいそうだった。考えたこともない責めに、天使は四肢を痙攣させ苦悶する。お注射を続けられるたび、粘液を溜め込まれた乳腺葉が異様な熱を帯び始めていた。おっぱいが内側からドロドロに蕩け、乳房全体がどっつと性感を増して紅潮する。

「はああっ……はう。はふう！ くひあ、あ、熱い……どうして、おっぱい……イ！」

千切れそうなほどに乳首を虐められ、鋭い針で容赦なくピアッシングされた。そんな虐待を受けているのに、両の乳房が疼いて仕方ない。異常すぎる乳悦を否定するように、エリカはふるふると長髪を振り乱した。だが唇から漏れる吐息は、やはり熱く、甘い。

「ふふ、効くでしょう？ 桐山とダームの分まで濃縮したデモナウィルスだもの、媚薬効

果も三倍以上よ。くくく、あなたのワクチンごときで浄化できるはずがないわ！」

「く、ううう。そんな、こ、この程度のウィルスなんて……くふ、はひいいん！」

ちゆる、くちゅつ！ 口答えしようとした瞬間、針触手を蠢かされ乳管を掻き混ぜられた。瞬間、狂いそうなほどの切なさに打ちのめされ、少女は情けない声を搾り取られる。

——こ、こんな！ 嘘よ……おっぱいの中、か、感じすぎちゃう……！

身体で教えられた——女医の説明通り、注ぎ込まれたウィルスの効果は悪魔的だ。自分の意志など無関係に官能が猛り、乳房だけでなく身体中からどつと汗が噴出してしまふ。乳粘膜から吸収させられた媚薬は一瞬にして全身に染み渡り、快楽神経を狂わせていた。強制的に増感された女体へ、無数の触手が襲いかかる。野太い肉蛇が乳房の根元に巻きつき、ぎゅうぎゅうと揉み潰して少女を可愛がる。媚薬注射でいつそう脆くなった弱点を乱暴に搾乳され、エリカは背中を仰げ反らせ悶絶した。辛そうに震える両太ももには、太く長い肉紐がなぞりつけられる。きめ細かく滑らかな皮膚に包まれた、女の太ももを思わせる柔蛇だ。美脚を包むニーソックス越しに、肉感的な媚肌がびっちり吸いつけられる。そのまましゅ、しゅつと動かされ、牝肉の触感をたっぷりと味わわされた。

「ひあ、だめ、だめえつ！ 敏感なのに……そ、そんな優しくされたらあ……ふあああ！」

太もも同士をスリスリと擦り合わせ、しなやかな指使いで裸乳を優しく可愛がられる。媚薬効果で甘さを増した、同性同士だからこそ味わえる背徳的な悦び。潔癖な少女にとって馴染みのない、あまりに耐え難い甘悦だ。ゾクゾクと駆け巡るレズプレイの魔悦に、両

足を痙攣させ感じ入る被虐の天使。子宮が潤み、震える太ももに愛液が滴る。

「ふふ、怯えちゃって……可愛い。女同士だからって遠慮しなくていいのよ……ほらあ」
可愛らしい痴態に、生来の嗜虐心を刺激される。ペろりと舌なめずりすると、魔女は濡れた唇を少女の首に這わせた。肉感的な唇が、震える首筋に吸いつき舐め上げる。

「う、ふあ……んくうっ！」

ちゅ、くちゅっ。看護服から覗く首筋に、優しくキスされた。艶かしい唇の感触が、乙女の柔肌を蹂躪する。甘く啄ばまれながら涎を塗り込まれ、ぬめる舌先で首筋を何度も何度もなぞられた。唾液に含まれたデモナウィルスの影響で、首元がうずうずと火照りを増す。怖気とともに駆け巡る妖しい感覚に、エリカは柳眉を震わせ身悶えた。

「ピチピチのお肌、震えてる……ふふ、わかる？ 細胞自体が悦んでいるのよ。気持ちいいでしょ。あなたも無駄な抵抗なんて諦めて、この快感にすべてを委ねればいいのよ」

「くう……くふうう！ 冗談でしょ、こんなのに、わ、わたしが……ふああうーッ！」

ずぶ、ぬぷずぶ！ 乳首に刺されっぱなしの注射針が抜き差しされ、太い触手に力強く搾乳される。拒絶の言葉さえ許されず、おっぱいを揺すって悶絶する乳辱のヒロイン。同時に媚薬まみれの柔肌を意地悪く啄ばまれ、たまらない快感に顔が震えてしまう。

「本当、負けん気の強いコ。生意気ばかり言っていると、お口塞いじゃうから……んちゅ」

「あう、く……や、んぶうっ！」

首筋を舐め上げながら顔面にまで這い上がった魔女の口が、天使の唇に重ねられる。精

一杯の強がりさえまともに言えない唇を抑え込まれ、ぬるぬると唇門を舐め犯された。

——う、あつ。ヌルヌルして……き、気持ち悪い……！

その感触に、たまらず息を呑むエリカ。変異した麗子の長舌は、ナメクジそのものの触感を誇っていた。ぶよぶよとゼリー質な肉舌からは、大量の唾液が滲み出すように分泌されている。生理的嫌悪を催す肉塊でゆっくりとなぞり上げられ、唇全体を蹂躪される。

「くふ……い、いやっ……んう。ちゅ、んううう……！」

おぞましいキスに戦慄しながらも、エリカは必死に口を噤んで肉舌の侵入に抗う。だが唇全体にウィルス唾液が染み込まされ、乳房や太もも同様に性感を煽られ力を奪われる。必死に食いしぼる菌茎は切なげに痙攣し、お口の中までもがうずうずと疼き始めていた。

「ふふ、こんなに感じてるのに本当に強情なコね……なら、これでどうかしら？」

そんな健気な抵抗を愉しみながら、麗子は新たな責めを追加する。大きく口を開けた腸管ヒルが、悶えるたびにひらつくミニスカートの内側に潜り込んできた。

——あああつ……ダメ。いま、そんなとこまで責められたら……！

陵辱蛇の目的がなんなのか、哀しいことに被虐のナースには推測できてしまっていた。恐怖と焦燥、そしてマゾヒスティックな期待感とに、きゅんつと子宮が軋む。

「くう、ふあ、らめえ……っん。そ、そんな、許さなひ……い！」

ショーツの下で、ひくひくと秘唇が怯える。女の子にとって一番大事で、そして脆い急所を守るべく、エリカは両足を閉じようとした。だがその瞬間、レス触手に太ももを優し

く愛撫され、媚薬を染み込まされて抵抗力を奪われてしまう。それでも必死に力を込め、腰を引いて内股気味に膝を擦り合わせる変身ナース。なんとか秘苑だけは守ろうとするが、陵辱蛇の狙いは少女の予想を超えたところにあつた。前穴を守ろうとしたせいで皮肉にも後ろに突き出してしまった豊満ヒップへ、吸血ヒルがその頭部を擦りつけてくる。

「ふ、あ!? ひゃ、そ、そんなところ……ッ!?!」

予想外の部分への攻撃に、天使は敏感に腰を震わせた。薄生地に浮き出している尻谷に、肉蛇がなつくようにして頭を擦りつけてくる。いやらしい往復運動で粘液をすり込まれ、尻の間にショーツを食い込まされた。恥ずかしすぎる部分をねっとりとならされ、たまらない嫌悪感が駆け抜ける。肛辱の予感に、潔癖な少女はいいやと首を振って身悶えた。

「あらあら、怯えちゃつて。そう言えば、お尻はまだ未開発だったわね。ふふ、何事も経験よ……看護婦なんだもの、浣腸の仕方ぐらい自分の身体で覚えておかないとねえ!」

「うあ……や、いやっ……ん! いやよ、お、お尻なんて……っ!」

きゅつとヒップを引き締め凌ごうとするも、そんな可愛らしい抵抗では貪欲な肉蟲は止められない。生意気に盛り上がった尻峰に、ヒルが大口を開けてかぶりつく。

「ひっ、痛! お、お尻……んうううう!」

吸管状の口吻をびっちり吸いつけられ、下着ごと飲み込まれた。肉蟲ホースが激しく蠕動し、尻肉をくちやくちやくと咀嚼する。苦痛に腰を揺するエリカだったが、媚薬シロップに漬け込まれた桃果実は、そんな乱暴な食事にも被虐の悦びを覚えてしまっていた。

——あ、ああっ。食べられてる……ぬるぬるして、お尻、食べられてる……!

ヒルの口腔内は、ぬかるんだ腐肉の坩堝だった。不定形に流動する柔肉が、飲み込んだ尻肉をとらえどころのない愛撫で可愛がつてくる。さらには口腔内にはウイルス混じりの唾液がたっぷり含まれており、咀嚼のたびに媚薬ウイルスを塗り込まれた。危険な毒に犯された尻肉は性感を増し、揉みくちやに嬲られることにマゾヒスティックな悦びを覚えてしまう。怪物に乱暴に弄ばれ喰らわれているという被虐感が、倒錯した悦びを喚起した。快感に耐えきれずふるふると小刻みに揺れる豊臀を、ヒルが猛然たる勢いで咀嚼する。

「ひ、あ、ああっ! だめ、お、お尻食べないで……ひい、んああああ!」

ズル、ズルズルズル! もぎ千切られんばかりの勢いで肉を吸われ、ハートヒップが形を崩す。あまりの吸引の勢いに耐えきれず、薄いショーツはビリビリと破れてしまっていた。それでも貪欲な怪物は食事をやめず、下着を飲み込みながら吸引を続ける。シルクショーツはすべて喰られ、スカートの下はパンティ一枚ない全裸の状態に剥かれてしまった。解放感にぷりんっと尻肉が躍り、外気の冷たさを感じて肛門がきゅうんと竦み上がる。

皮を剥いて食べやすくなった水蜜桃を、ヒルがさらなる勢いで貪り喰らう。

「ひ、あああつ! ま、また食べられて……お、お尻飲まれちゃう……うううう!」

ずるる、ぞぶぞぶ! ショーツの緩衝なしに味わわされる吸引の虐悦は、先ほどより何倍も苛烈でそして気持ちよかった。ぬるぬるした感触が尻肌に直接食い込まされ、微細な脈動までが伝わってくる。さらには地肌に媚薬が直接浸透し、外気の冷たさなど一瞬で忘

れてしまうほどに肉芯が燃え上がった。火照りを増すヒップを揺すりたくり、あさましく悶える肛虐のナース。肉感的に揺れる裸尻の下から、新たな陵辱蛇が迫った。野太い砲身に無数の肉瘤を脈打たせ、先端を龜頭状に膨らませた、異形の触手ペニスだ。だらだらと先走りを零す擬似男根が、剥き出しの尻穴目かけて這い上がっていく。

「く、ひっ!! いやっ、そ、そこはだめ……!」

接近する怪物の存在感に、今度こそ尻たぶに力を入れるセラフィックナース。だがその間も臀部を喰われ続け、あまりの尻悦にじっと力を込めることもできない。さらには太もも拘束のレズ触手たちにぬるぬると膝裏を擦られ、くすぐったさに膝が笑ってしまう。

一瞬力が抜けたところ目がけ、擬似男根が狭隘な菊門に潜り込んできた。

「ほおら変態看護婦さん、浣腸のお勉強させてあげるわ……んふふ、入れるわよお!」

「く、や、いやあ! お、お尻なんて……くあ、んひいいいいい——!」

双臂を力ずくでこじ開けられ、奥に窄まる肛門に無理矢理挿入される。真下から突き上げられ、一瞬腰が浮き上がった。逆方向から排泄口を拡張され、凄まじい圧迫感に苛まされる。嘔吐感すら催し、エリカは背筋を伸ばし悶絶した。いけない部分へ挿入された汚辱感で、純潔な瞳から涙が零れる。しかも尻穴に突き刺された触手のサイズときたら——。

——ふ、太い………太すぎる! こんな………お、お尻、裂けちゃいそ………!

ウィルスで変異した異形ペニスは、大蛇のような太さと長さを備えていた。しかも奇根の表面には無数の肉瘤が実り、それがどくどくと別個に蠢いているのだ。入れられただけ

でも裂けてしまいそうなほどの極太挿入に、開ききった尻たぶが痛ましく痙攣する。

「い、いや……こ、こんなぁ！ お尻なんていやよ……抜きなさい、ぬ、抜いて……！」

「ダメよ。浣腸ぐらい今から勉強しておきなさい、こうやってやるのよ、ほら、ほらぁ！」

ニチャツ、ズブズブズブ！ 太紐が素早く抜き差しされ、広がったカリに肛門を拡張された。抜かれれば排泄欲を刺激され、突き込まれば凄まじい嘔吐感に悶絶させられる。

「いや、いやあぁあ！ そんなのに使うところじゃないのに……ひぎッ、んぎいっ！」

肛門が裂けそうな苦痛と、不浄の穴を犯されているという背徳感。はじめての肛姦に、少女は涙を流し苦悶した。もはや口を閉じることすら忘れ、声の限りに絶叫する。

「んふふっ。嬉しいわぁ。処女膜だけじゃなくって、アナルヴァージンもわたしのものになったのね。あぁ、ひよつとしたらファーストキスもかしら……こうやって、ねぇ！」

「ん、あ……ん!? んぁ、つんちゅ……んぷううう！」

一瞬の隙を突かれ、力強く唇を奪われた。咄嗟に唇を締めようとしてももう遅い。獲物に喰らいつく毒蛇そのものの俊敏さで、異形の肉舌が口腔内に突き込まれた。ナメクジじみた異形舌が、少女の口壺を蹂躪する。菌茎や内頬をヌルヌルとなぞられ、震える舌を絡め取られた。そして舌同士が絡み合わされ、大量の唾液をトロトロと注ぎ込まれる。

「んふふ……ん、ちゅ。いいわ、あなたのお口……ん、ちゅ。とつても甘くていやらしい味よ……ちゅ、ちゅ。ふふ、こうしてずつとキスしてたいぐらいよ……んくちゅ」

「ん、ぷふうっ！ い、いや……ん、ちゅ！ んう、んぷううううう！」

淫靡な接吻から、首を振って逃れようとする口唇天使。だが触手と化した細髪が素早く伸び、ナースキャップを押さえ込まれて頭を固定される。淫縛の少女は、真正面から魔のディープキスを受け入れるしかなかった。

麗子の接吻は蛇のように執拗で、攻撃的だった。絡め合った舌を激しく蠕動させ、シコシコと扱かれて虐められる。喰らうように唇全体を押しつけられ、息もできないくらいに密着状態で唾液を口移しされて飲まされる。かと思えば突然舌を解放され、お口の中全体を攪拌され虐められた。変幻自在の舌技に、初心なお口は抵抗もできず蹂躪される。

「ちゅ、ん、くちゅ。ねえ、わたしのキス上手でしょ？ お口、感じちゃうでしょ？」
「んう、んぷあ……あふ、くちゅ。そ、そんなことな……ふあ。んうう、っんちゅ！」

拒絶したくても、お口が勝手に動いてしまう。エリカは睫を震わせながら、自ら接吻を受け入れてしまっていた。喉がこくこくと蠢き、注がれる唾液を嬉しそうに嚥下する。

——ど、どうして……ああ。わたし、こんなキスに感じてるなんて……！

自らの破廉恥な反応に、頬を染め恥じらう純情少女。だが、感じてしまうのは止められない——乳管や尻穴で味わわされている苦虐に対し、女同士で交わすキスはあまりに甘美なものなのだ。しかもたつぷりと注がれる唾液は、そのすべてがウィルスに汚染された媚薬。注がれる唾液を嚥下すれば、腹の中から燃え上がるように火照ってしまう。

——あ、ああつ！ ダ、ダメよ江梨香……こんなものに、流されちゃダメ……え！

これがデモナ病の影響だと理解し、セラフィッククナースは咄嗟に抵抗の意志を振り絞つ

た。強靱な意志力でワクチンを活性化させ、魔の媚毒に抗しようとする。だが――。

「今更逆らっても遅いわ。今のあなたの身体、こんなことされても感じちゃうでしょ!」
「ふえ、んぶあ……んああああつ!」

めりっ、ずぶずぶずぶ! アナルレイプの触手根が、突如激しいピストンを開始した。入れられただけでも苦しかった尻穴を激しく穿り返され、脈打つ肉瘤で腸鬩の一枚一枚を磨き抜かれる。同時、ニプルファックの髪触手も激しく蠢き、乳首を何度も何度も抜き差しされて乳腺を抉られた。壊れそうなほどの虐悦に、女体の急所が燃え上がる。

「くア! ひイ、ひいいんッ! お尻も、お、おっぱいも激しすぎ……いいいいイッ!」
脳天にまで突き上がる悦虐に、一瞬意識が消えかけた。苛烈な陵虐と同時に、太ももや乳房はどこまでも優しく愛撫され、快楽と苦痛の二重奏で心身を蝕まれる。喘いだ刹那、開いたお口にナメクジ舌を突っ込まれ、大量の媚薬エキスを飲まされる。

「んふあ……ん、んちゅ! こく、こく……んふあ。あふあ熱ひ、熱ひいい……い!」
唾液を嚥下した刹那、お腹の中がぼうっと熱を増した。淫らな毒が全身に回り、お酒に酔ったように意識が酩酊する。快楽に犯された美貌は、艶っぽく紅潮していた。

「これだけわたしの唾をご馳走したんだもの、もうあなたは完全にデモナ病に感染してるわ。いくら逆らってもムダ……もう、何をされたって気持ちよくなっちゃうのよお!」

「くふう……ん、んううう! 違ふ……わたひはあ、ん、ちゅ。ま、まだ……ああ!」
もはや浄化作用も働かない。それでも抵抗の意志だけは絶やすまいと、強気を貫く変身

ヒロイン。手袋に包まれた指先をきつく握り締め、必死で意気を振り絞る。だがその直後——ニプルとアナルを犯している触手が蠕動し、最後の抵抗心までをこそぎ取る。

——や、ふああ!? そんな、こ、これ……!

ドクドク、ビクビク。乳腺内と腸管で同時に響く、遅しい脈動。たまらず、子宮がきゅんんと下がつてしまう。それはまさに、男根が欲情をブチまける予兆そのものだった。

「さあ、もつと感じられるように……ステキなお薬、たっぷりお注射してあげるわね!」

「ひあう……ら、らめ。出さないで……そ、そんな……あはあああああ〜!」

どびゅびゅびゅつ! どばあ、どっぴやああああ! 哀願虚しく、三匹の肉蟲が同時に精液を吐き出した。尻穴と左右の乳管、大量の灼熱が三箇所同時に注ぎ込まれる。

「く、くひいいイ! また乳首出され……お、お尻もッ……熱い、熱ひいいイッ!」

三点同時の媚薬注射に、エリカは腰を振りたくつて悶絶する。激しい蠕動で穿り返された直腸へ、どろどろしたウイルスがたっぷりと流腸された。乳首内に打ち込まれた薬液は最初の乳射より遥かに多く、おっぱいがパンパンになるほどに詰め込まれる。入りきらなかった白濁が勃起乳首から漏出し、Dカップの巨乳を逆流ミルクで汚辱した。

「うふあ、あ、ああっ! おっぱひいい……くふう、くひいいいん!」

豊かな巨乳を完全に病原菌で満たし尽くされ、入りきらない濁液の逆流に乳腺をこそがれる。その激感たるや、想像を絶するほどだった。まるで母乳を噴き出すかのように粘液を逆流させながら、未曾有の乳悦に悶えまくる被虐のナース。その間にもウイルス流腸は



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>